

桜陽だより 第百号記念 特別寄稿

クリエイティブオフィスキュー社長 伊藤 亜由美さん

私が桜陽高校を志望した理由はただ一つ、音楽をやる為！それだけでした。

中学生の時、友人に誘われて桜陽高校の文化祭の有志ステージで、長髪でプロレスラーのような体型の人（のちに NIGHT HAWKS というバンドでメジャーデビューする青木秀一氏）が歌っていたデイトップ・パールのナンバーが衝撃的かつ感動的で、「あんな凄い人がある桜陽高校に入学して、バンドを組むしかない！」という実に単純なきっかけでした。

中学時代にハマっていたアコースティックギターとも卒業とともにお別れをして、桜陽に合格したら親に光栄堂でエレキギターを買ってもらおう約束もとりつけて無事に合格。入学早々バンドメンバー

を見つめるべく、連日他のクラスに出入りして、音楽好きを見つけては楽器やっけてバンド組もうとそそのかし、一年の終わりに「ガールズバンドーラム・レーズン」として、卒業生を送るステージで初演奏をしました。

今振り返るとただの音楽好きなズブの素人にベースやドラムを買って練習しろって、かなり強引なプロデューサーだったなと反省しています（笑）
兎にも角にも音楽漬けの日。

来る日も来る日も自宅で、学校でギターの練習、放課後は一目散で学校をあとにして、光栄堂のスタジオでメンバーとの音合わせ。
練習後に大好きなラム・レーズンアイスクリームを食べながらの反省会は音は

もちろんのこと、MCや衣装、ステージパフォーマンスに至るまで話すことは尽きません。

文化祭などの学校のステージのほか、コンテストに出場したり、自分たちでライブを企画したり、ポर्टフェスティバルのスタッフをしながら、野外ステージも経験したり、学校の勉強とは違う学びと沢山の人の出会いがありました。

メンバー内でケンカもいっぱいしたけれど、「お客様に楽しんでもらうステージを作る！」という目標を掲げ、沢山の拍手、掛け声、そして大きな拍手を頂いた時には目頭が熱くなり、とびっきりの笑顔をメンバー全員で共有しました。

現在私はおお客様の心を動かす、生きる上での何かの「きっかけ（CUE）」になっ

てもらいたいという想いを大事にしたエンタテインメントプロデュースという仕事をさせて頂いています。

学生生活の殆どを捧げた音楽活動から沢山のきっかけをもらったような気がします。

貴重な三年間にどれだけの刺激を受け、人との関わりの大切さを知ることが人財生におけるかけがえのない財産になっていることは間違いないです。

高校生活は宝の山。掘って掘って掘り尽くしましょう！



【プロフィール】

1992年に芸能プロダクション「クリエイティブオフィスキュー」を設立。

以降、大泉洋らTEAM NACSが所属、個性派俳優を抱え全国へと活躍の場を広げる。また、プロデューサーとして鈴木貴之が監督を務めた映画『man-hole』や『river』、TEAM NACSの全国公演『LOOSER』失い続けてしまうアルバム』を皮切りに数多くの作品で采配を振るう。

近年は食、観光、地域産品など北海道のさまざまな魅力を全国に伝えたいという思いから、映画『しあわせのパン』（2012年）、『ぶどうのなみだ』（2014年）、『そののレストラン』（2019年）の企画やwebメディアなどの連載を担当するなど、北海道の魅力を発信し続けている。2012年11月にオープンしたベーカリーショップ「boulangerie coron」は現在札幌市内で三店舗展開。2015年9月には農が見えるレストランをコンセプトに「brasserie coron with LECREUSET」をオープン。

退職される二人の
教職員の方から

『20/30』

西谷 光司



「馬車馬のように働くつもりです。」 「もうこれ以上、私をがっかりさせないでください。」 「今日だけは淡々と行きます。」 「何か手伝えることがあったら言うてください。」

初めて桜陽高校に来て先生方の前で、全校生徒の前で、クラスの生徒の前で、部活動で言った言葉。（よく覚えていたなあ）あれからもう気づけば二十一年…。いろいろな場面でちゃんと働いたかな？手抜きはなかったかな？どうなんだ西谷！

自己評価で言うと、うぬぼれ半分以上で結構満足しています。ちゃんと働いていない、手抜きをした場面もあったのは事実ではあるが、いつも私の周りには私を支えてくれる人たちがたくさんたくさんいてくれて、ともに前向きに動いてくれていた。感謝、感謝の気持ちでいっぱいです。わがままで頑固な私を少しだけ成長もさせてくれました。

現・旧の桜陽生と先生方、父さん、母さん方…、充実した日々でした。ありがとうございました！

『私の小樽』

谷戸 雅



○緑町の第一大通りを山の方へのぼってゆくと、その

中ほどに菊水パンはあった。当時としても珍しく、ガスでも電気でもない薪を焚いて焼き上げるタイプの釜を使っていた。木製の引き戸をゴロゴロと開けると、こじんまりとした店に、ショーウインドウというには華奢でレトロな木枠の棚が1つある。そこに敷かれた経木の上に、アンパン、クリームパン、メロンパン、角食たちが控えめに並べられていた。お気に入りのメロンパンは、カリカリふわふわで噛みしめるたびに、ほかのどの店のメロンパンとも違った香りが広がって、忘れていた遠い昔の記憶をよみがえらせてくれた。

○いろいろな街に住んできましたけど、一番のお気に入りには小樽です。この街の高校で退職を迎えられたことはこの上もない喜びです。たくさんの人に支えられ今日を迎えられることができました。どうもありがとうございます。
